

第11回群馬県地域リハビリテーション協議会開催

群馬県地域リハビリテーション協議会委員長 山口晴保

平成22年3月4日(木)14時から県庁にて第11回群馬県地域リハビリテーション協議会が開催された。任期切れに伴い何名か委員の交代があり、県医師会からの委員が鈴木憲一先生から長坂資夫先生に変更になって、長坂副委員長、山口晴保委員長の体制が決まった。

県支援センターと12カ所の広域支援センターの活動概要が報告されたあと、期限が切れる支援センターの指定について議論があり、今回は全センターが2年間継続と答申することが決まった。このなかで、(旧)吉井町が高崎市に組み込まれたことによって行政と広域支援センターの活動エリアにねじれが生じていることが指摘されたが、基本的にはこれまで通りの活動エリアで事業を行うことが確認された。

その後、広域支援センターと保健福祉事務所に対して行ったアンケート結果を踏まえ、この事業では保健福祉事務所の存在意義が大きいこと、しかし保健福祉事務所のマンパワーにゆとりがないことなどが指摘された。

介護予防サポーターの育成状況については、平成21年度だけで初級879名、中級650名、上級356名が誕生予定である。平成18年度からの4年間では、初級5,239名、中級3,526名、上級1,247名となる。

順調に育成され、各広域支援センターが育成やスキルアップ研修に協力している。平成22年度は29市町村が養成研修の実施を予定して、予定なし(未定を含む)は6市町村である。そして、35市町村すべてで介護予防サポーターを活用している。また、スキルアップ研修は34市町村で実施されている。このように、これまでの4年間で介護予防サポーターは全県下に根付いた活動になりつつある。

平成22年度の地域リハビリテーション推進事業の予算額は、前年度比約15%減であるが、経済状況からやむを得ない数字であろう。今後新しい事業を展開していかないと、基本的には予算は毎年減額となる。

群馬県地域リハビリテーション推進指針については、平成16年の作成から6年経過しているの、地域包括支援センターや介護予防サポーターなどその後の状況に合わせて手直しをすることとなった。この事業の活動を小児障害や精神障害などにまで広げることについては、今後さらなる議論が必要なため、指針の大幅な改訂は見合わせる。事業運営は、できることから徐々に広げるという従来のスタイルで対応する。

その後、群馬県広域支援センター連絡協議会が開催され、各広域支援センターからたくさんの意見が寄せられた。

広域支援センター連絡協議会の報告を中心に

平成22年3月4日(木)、県庁の会議室において平成21年度の広域支援センター連絡協議会が開催された。県内12箇所ある広域支援センターから計14名の代表者と県の介護高齢課、県支援センターの関係者が出席した。

例年と同様に、先行して群馬県地域リハビリテーション協議会が開催された。この会議では、広域支援センターの活動状況が報告・議論されることなどもあり、協議会委員のほかに、広域支援センターの代表者も招集された。今年も各広域支援センターが積極的に取り組んできた介護予防サポーターの養成や、昨年の広域支援センター連絡協議会で要望のあった「群馬県地域リハビリテーション推進指針」の改訂についても話し合われた。まず、広域支援センター連絡協議会に関する事のみ、簡単に触れておきたい。県から、

群馬県地域リハビリテーション支援センター 酒井保治郎

介護予防サポーターの養成は初級5,231名、中級3,537名(平成22年1月現在)と順調に進んでいることが報告され、今後は上級サポーターをいかに育成するかが課題となってきた。また、「群馬県地域リハビリテーション推進指針」については、県地域リハビリテーション支援センターのワーキンググループが、古くなった統計資料を更新すると共に、当時なかった地域包括支援センターなどの術語を加えて、全体の構成を見直し、原案を作成し、群馬県地域リハビリテーション協議会に意見を求める形で改訂することが決まった。地域リハビリテーションの推進指針である以上、高齢者に偏ることなく、地域に暮らす精神障害、発達障害などの方々も含め、かつ地域コミュニティとの関わりも包含する方向で進めるべきとの意見も強く、今後県を中心に、関連する医務課や障害政策課とも相

話し、検討することが決められた。

さて広域支援センター連絡協議会では、各広域支援センターから市町村などとの連携や上級サポーター養成に関する意見などが述べられた。市町村とうまく連携でき、上級サポーターの養成も順調に進み、一部の介護予防事業については、サポーターが中心となり、企画から実行まで行った地域もある一方、上級サポーターについてはこれから養成を始める地域もあり、県内の地域による差がみられた。総じて、地域の医師会との協力がうまくできている地域では、協力病院が増え、地域包括支援センター、保健センターの協力も得られ、上級サポーターの養成、活用がうまく進みつつある印象を持った。本県では、広域支援セ

ンターの多くは民間病院が指定を受けており、本業が忙しく、かつ予算も減少する中、サポーター養成や連携に奔走されており、努力に頭が下がる思いであった。活動に限界は感じつつも、確実に連携は広がっているとの意見が述べられた。

県支援センターとしては、昨年度に続き、上級サポーター養成・活用の先行事例を集めた「2009介護予防サポーター育成・活用事例」を近く配布しますので、ぜひ参考にしていただければと思っています。また、協議会の場で、ご意見をいただいた「介護予防サポーター育成教材」についても、初級・中級編を改訂し、電子媒体による配布を予定しています(次ページ下欄のお知らせ参照)。

第8回群馬地域リハビリテーション研究会報告

群馬大学医学部保健学科 勝山しおり

平成22年1月23日(土)、この時期の恒例事業となっている群馬地域リハビリテーション研究会を開催しました。第8回目となった今回は、初めて高次脳機能障害に焦点をあて、基礎研究そして臨床という流れの内容で企画しました。

「ネタ切れになったんじゃないの?」という声も聞かれましたが・・・

いいえ、決してそんなことはありません。地域リハビリテーションに関する、その時の情勢を踏まえたトピック的内容や、高齢者や介護予防だけでなく、将来的には高次脳機能障害、難病、精神障害や知的障害など広く取り上げたいと思っているのであります。

さて、群馬会館ホールは410席を有する施設ですが、今回は2階席を開放するほどの皆さまに参加して頂くことができ、高次脳機能障害への関心の高さがうかがえました。講演は国際医療福祉大学保健医療学部、言語聴覚士でもある内田信也先生が「脳機能イメージングの基本原則とリハビリテーションへの応用」、講演は広島県高次脳機能センター、医師の丸石正治先生が「エビデンスに基づいた高次脳機能障害者へのアプローチ」と題してご講演くださいまし

た。

ご協力頂いたアンケートの結果を見ると、約半数の方が、全体を通して「かなり満足」または「大満足」との感想を持ってくださったようでした。研究会に対するご要望は毎年、運営側で講師選定の参考とさせていただいております。様々な専門職が集う研究会であるため、興味や関心に幅がありますが、参加して良かったと思っただけのよう来年度も企画していきたいと思っています。

最後に、群馬地域リハビリテーション研究会を企画している研究部会は、様々な職種、年代のメンバーで組織されています。年1回の事業ですが8回目となると、阿吽の呼吸で運営できるようになりました。今回は1階の広間で結婚披露宴が行われるとのことで、集合写真に写ってしまったり、披露宴会場に紛れ込んだりしないものかとヒヤヒヤしましたが大きな混乱も無く無事に終わることができました。部会員のみなさん、そしてご参加くださいました皆さま、ありがとうございました。

毎年これが終わると、無事に一年が終わったなぁと思うのでした。

研究会に参加して

もてき脳神経外科 通所リハビリ 言語聴覚士 高橋典子

平成22年1月23日(土)、第8回群馬地域リハビリテーション研究会が群馬会館大ホールで開催されました。会を重ねるごとに参加者の人数も徐々に増えつつあるようです。今回は、初めて2階席まで開放され盛況のうちに終わることが出来ました。

講演は「脳機能イメージングの基本原則とリハビリテーションへの応用」というテーマで国際医療福祉大学 保健医療学科講師の言語聴覚士 内田信也先生にご講演いただきました。

fMRI(機能的MRI)を使い、脳の ある活動とある活動における賦活の差から、特有の賦活部位を割り出し考察を加えていくという手法を用いながら、fMRIの基礎原理から、自身の研究を詳しく聞くことができました。失語症やマヒなどの後遺症をもつ脳損傷患者の回復過程における右脳と左脳の役割の変化や、訓練方法の考察などリハビリにたずさわる者として臨床の場で考えてみたい事柄もあり興味深く聴講しました。

「明日の臨床には即座にはまったく役に立たない。5

年10年後の臨床に役立つと信じて」という言葉がありました。現状では脳損傷患者さんに対して検査できにくいなど、fMRIの制約や限界についても言及されながら、今後の治療仮説やリハビリテーション領域への応用を構築されていく研究であると感じさせられました。

研究会に運営のお手伝いとして参加させていただき3年目になります。今回言語聴覚士の先生をお呼びすることができ、緊張しながら座長として壇上に上がり

・「エビデンスに基づいた高次脳機能障害へのアプローチ」を聴講して・

群馬医療福祉大学附属リハビリ専門学校

(旧校名:群馬社会福祉大学附属医療福祉専門学校)

高次脳機能障害者と家族と支援者の会 NPO 法人ノーサイド 理事

作業療法士 山口智晴

丸石正治先生の講演内容は、最新の脳科学研究から得られたエビデンスに関する内容から、高次脳機能障害を取り巻く環境や社会制度の現状、そして先進的な広島県での取り組みに至るまで、幅広く非常に充実したものであった。

講演会前半では、『高次脳機能障害』の定義や高次脳機能障害支援モデル事業の経過、高次脳機能障害を支える現在の社会制度の問題点などについてお話があった。具体的には、医学的・学術的な『高次脳機能障害』の定義は、脳損傷に起因する認知機能障害(失語、失行、失認、記憶・注意障害など)の総称であるが、行政的な定義は「記憶障害・注意障害・遂行機能障害・社会的行動障害」の4つであり、それがどのような背景で決められたかなど、とても興味深い話であった。また、高次脳機能障害支援普及事業により、支援拠点機関の設置が全国で進んでいる(群馬県は未設置)ことについてもお話があった。さらに、広島県高次脳機能センターでの先進的な取り組みについても、紹介があった。そこには、高次脳機能障害に特化したケアユニットがあり、error-less learning に配慮した環境整備やスケジュールノートの活用などが徹底され、全てのスタッフが対象者に一貫した対応ができるように配慮されているとのことであった。

講演会後半の内容は、高次脳機能障害者の就労支援や社会的行動障害についてであった。就労支援のお話の中で最も印象に残ったのが、就労できるか否かの要因は、従来の神経心理学検査の結果(つまり基本的な認知機能)だけでなく、支援コーディネーターの存在や、就労先の上司の協力の有無といったことが大きく影響したという報告である。これはよく考えれば当然のことでもあるのだが、認知機能面の改善に

ました。壇上では余裕がないので思うように講演を聞いていなかった気がしました。しかしながら、質疑の時間にはフロアからいくつもの質問があり、講演とあわせて『高次脳機能』や『高次脳機能障害』といった分野に関心が高くなってきていることを感じることができました。貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。

着目するだけでなく、他職種と連携して総合的な支援を行うことの大切さ、さらにその体制作りの必要性を改めて実感させられた。また、社会的行動障害については、未だ定まった評価指標がないことや、グループ訓練の取り組みが有効であることなどについて、詳しくお話していただき、新たな知識を得ることができた。

全国で未だ支援拠点機関が設置されていない都道府県は、本県を含めて僅かである。現在、設置に向けた行政の動きがあるようだが、ただ拠点機関を定めて相談業務を開始しても、現状では実際に対応できる地域資源が群馬県にはほとんど無いため、本当の支援ができるかは疑問も残る。その点については、今後の行政の動きに期待したい。しかし、講演会最後に会場からの「本県でも広島県のように、幅広く連携した支援体制ができてくると期待してよいか?」との質問に、先生は「行政だけでは難しいでしょう。誰かがやっていく必要があると思う。」と回答された。確かにその通りかもしれない。我々「NPO 法人ノーサイド(<http://www.npo-noside.org/>)」は高次脳機能障害者に特化した、「居場所づくり」にも今後は取り組んでいく予定である。

本研修会には、多くのリハ関連職種の方々が参加されており、高次脳機能障害に対するリハや支援が注目されていることを改めて実感した。また今回の研修会に参加して、高次脳機能障害者の支援の難しさも感じたが、今後もノーサイドの活動などを通して、少しでも本県における高次脳機能障害者の支援に役立つことができたら幸いに思う。最後に、このような先進県での実践的な取り組みを勉強させていただく機会を設けてくださった、貴研究会の関係者の方々や講師の先生に感謝したい。

<お知らせ>

「2009 介護予防サポーター育成・活用事例」 & 「初級・中級 介護予防サポーター教材 改訂版 2009」群馬県地域リハ支援センターのホームページへアップロードの予定です。(<http://www.grsc.biz/>)
群馬県地域リハビリテーション推進指針の改訂版も載る予定です。

介護予防まつり in まえばし

～ 群馬大学地域交流教育プログラムの活動発表 ～

群馬大学医学部保健学科地域交流教育推進室 山田圭子

1月31日(日)前橋市総合福祉会館を会場に「介護予防まつりinまえばし」が前橋市、前橋地域リハビリテーション広域支援センター、前橋市介護予防サポーターイベント実行委員会、群馬大学医学部保健学科地域交流教育推進室の主催で開催された。

このイベントは、前橋市と前橋市介護予防サポーターイベント実行委員会が中心となり、四者連携のもと、企画・運営された。群馬大学の学生は地域交流教育プログラムの一環として参加し、企画・運営やチラシ、ポスター制作に関わった。

来場者は総数635人、その様子は当日夜のNHKニュースで放映された。イベント内容は、高木市長の開会宣言、「介護予防とレクリエーション」の講演、「トークショー元気100歳に聞きました」「介護予防サポーター活動発表」などのステージでのプログラムと、介護予防サポーターが企画した健康チェックや体操紹介、認知症予防、口腔ケア、などのブースでのプログ

ラムで構成され、休憩所には骨骨アップのおやき試食コーナーも設けられた。

「地域交流教育プログラムの活動発表」ブースでは、学生4名が中心となってコミュニティ参加コース(オフキャンパス授業)をパネル展示、その説明や質問の対応を行った。空き時間には地域の方々や介護予防サポーターとふれあう機会として他ブースも訪問した。介護予防体操のブースで「やきとりじいさん」を踊る学生4名の姿がNHKニュースでも放映された。

今回、地域活動の中で「地域交流教育プログラムの活動発表」でき、来場者から「群大はこんなこともしているんだ」と声を聞くこともでき、アンケートでは「良かった体験ブース」として、評価も得た。「介護予防まつり in まえばし」を通して地域交流教育プログラムを地域の方々に紹介する貴重な機会となった。「人を知り、地域を創る」地域交流教育プログラムの次年度の計画に活かしていきたい。

県支援センター事務局便り

(H21.11～H22.3)

- 11.13 ニュースレター13号発送
- 11.5 県介護高齢課より2/3期事業予算を受入
- 1.23 第8回群馬地域リハ研究会
- 2.8 県介護高齢課より3/3期事業予算を受入
- 3.4 第11回群馬県地域リハビリテーション協議会・広域支援センター連絡協議会
- 3.31 2009 介護予防サポーター育成・活用事例発行
- 3.31 初級・中級 介護予防サポーター教材 改訂版 2009 配布
- 3.31 ニュースレター14号発行

群馬リハネット事務局便り

(H21.11～H22.3)

- 平成21年10月現在会員等の状況
- * 加入団体 33 団体
 - * 賛助会員 団体会員 2 団体
- (株)孫の手・ぐんま(旧ハッピーラブハッピー)と、榛名荘病院より賛助会費をいただいております。
- * 個人会員 1名
- 11.29 ぐんま認知症アカデミー第4回秋の研究発表会(後援)
- 1.23 平成21年第2回理事会

ぐんま認知症アカデミー

第5回春の研修会

日時:平成22年6月20日(日)13:30～18:00
場所:群馬会館 ホール 参加費:500円

- * 研究入門 講師:内田陽子(群馬大・看護)
- * 教育講演 (仮題)
「本人中心の認知症医療とBPSDの予防」
講師:高橋 智(岩手医大・神経内科)
- * 教育講演 (仮題)
「認知症でもダイバーショナルセラピーで笑顔に」
講師:芹澤隆子
(NPO日本ダイバーショナルセラピー協会・理事長)

詳細とお申込は、ホームページをご覧ください。
<http://happytown.orahoo.com/ninchi/>

編集デスク

山口晴保 清水尚子
山上徹也 角田祐子
発行

群馬県地域リハビリテーション支援センター
連絡先

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局
群馬大学医学部保健学科理学療法専攻内
Tel/Fax: 027-220-8966
E-mail: tsunoday@health.gunma-u.ac.jp